

大事なものは相手を理解する気持ち

『歴史と向き合う 日韓問題——対立から対話へ』を刊行

朴裕河さんに聞く

朴^{パク}裕河^{ユハ}氏

(韓国・世宗大名誉教授)

日韓で議論を呼んだ『帝国の慰安婦』などの著書で知られる韓国・世宗大名誉教授、朴裕河さんが『歴史と向き合う 日韓問題——対立から対話へ』(毎日新聞出版)を刊行した。1965年の国交正常化以降「最悪」と評される日韓関係をどう修復するか。なぜ日本の謝罪は、韓国に届かないのか。ウェブ会議システム「Zoom(ズーム)」を用いてソウルの朴さんにインタビューした。

日韓基本条約と日韓併合に立ち戻る

——本書に込めた問題意識をうかがいます。『和解のために』『帝国の慰安婦』などの著書で日韓の歴史問題を取り上げ、一貫して解決策を探ってこられました。

この10年で韓国に対する日本の思いが変わってきて、「もういい」という諦め、無関心な気持ちになっている方が目立ちます。そういう人が増えたのは確かだと思うので、も



韓国・世宗大名誉教授の朴裕河さん＝東京都内で2022年6月27日、高橋勝視氏撮影

う一度原点に戻っているいろんな問題を考えてみようというこ
とです。

そんな気持ちになるのはその時々々の状況に振り回されて
いるからではないか、それはもったにないという思いでし
た。対立する状況になるほど、逆に「なぜ」ということを
考えてみようということですね。『反日種族主義』（元ソウ
ル大教授らが執筆したベストセラー）などの本は、韓国の
民族性が問題だと書いていますが、私は互いの国の政治や
社会に関する情報の問題が大きいと思います。

——本書は、慰安婦問題、元徴用工問題、日韓併合、日
韓協定を取り上げながら、日韓の議論の構造を正面から論
じたという印象です。

両国が対立している徴用や慰安婦の問題を考えるには、
背景にある1965年の日韓協定（日韓基本条約及び付随
する諸協定）と、1910年の日韓併合に立ち戻らないと
接点が見いだせないと思いました。慰安婦や元徴用工の専
門家はたくさんおられますが、それが日韓協定や日韓併合
とどのように関わっているのかを論じたものは意外に見受
けられません。そこが大事だと思うので、歴史が専門では
ないけれどあえて論じてみました。

私自身は日本文学の研究者として、主に明治時代の文学
を研究しながらナショナリズムや帝国主義の問題を考えて
きました。日本の植民地支配にはずっと関心を持っていま



『歴史と向き合う 日韓問題——対立から対話へ』（毎日新聞出版）

す。実は『帝国の慰安婦』の前に植民地支配とは何かについて書きたかったのですが、ようやく今回少しだけ書いてみたことになりました。

——歴史問題は歴史学だけでなく、国際法や女性学、文学などからの研究もあり得ます。専門を超えて架橋する必要もありますね。

これまでの本も含めて、歴史をめぐる言説をテーマにした批評だと、自分では思っています。日韓対立の根っこにはナショナリズムの問題があるので、専門家に向けて書く、というより、一般市民と共に考えたいという思いが強かつ

た。アカデミア（学術界）でしかできないこともあります。が、それだけではできないことがやはりあるのです。

学者の責任、学問の政治化を問う

——歴史問題における学者、知識人の影響力は大きく、責任は重いとも思います。

おっしゃる通りですね。学術書の影響力には限界があつて、一般人向けの本を書いたと言いましたけれども、『帝国の慰安婦』は正に支援団体批判、運動批判でした。韓国の運動家の中には学者もいて、特に初期は学者が中心になっていました。本書の狙いを一言で言えば、学者の責任を問いたかったということです。学問の意義とは真実追求のはずなのに、実際には学問の運動化や、さらに政治化が見られました。

例えば2014年に朝日新聞が慰安婦の「強制性」の記事を取り下げた際も、一部の学者が主張する「強制性」の議論にこだわっていると見えました。その認識を具体的に批判する論文もようやく出てきましたが、日本の左派学者で批判した人は私の知る限りこれまでいませんでした。聞こえてくるのは、意見を言うのも不自由だということです。一種の文化権力が存在し、それが維持されてきたということ。学者も間違えることはあるし、自説を修正しながらやるのも可能だと思うのですが。

でもそれをしないのは、私の言葉で言えば、日本の一部の学者に（韓国を純粋な被害者像にかこつて免罪する）「帝國主義的温情主義」があるためです。

——本書は特にこの30年を対象に議論しています。日韓にとつて、どういふ歲月だったのでしょうか。

30年以上前の韓国の民主化闘争、広くは1980年の光州事件以降に起こったことが現代の韓国にすぐく影響を与えていることが、ここ数年の状況から見えてきました。同じ時期に韓国は大きく経済成長し、日韓関係も様変わりしました。

例えば2000年代初めに、ドラマ「冬のソナタ」が韓流ブームを巻き起こしましたよね。あの時、日本の女性が韓国の男性に関心を向け始めました。それまで日本女性は韓国の男性にどこか優越感を持っていたと思いますが、そんな関係が変化し始めた時代でした。他方で、韓国挺身（ていしん）隊問題対策協議会（挺対協）などが政治的発言を活発化した頃でもあり、自分の歴史観を強く押し出しました。80年代の民主化の後遺症^レでリベラルがねじれた進み方をしたと見る事ができると思います。とても残念であり、この間、私自身も私の『和解のために』をめぐる研究会が分裂するねじれを経験しているんです。

植民地化正す流れ、日本が先導を

——『歴史と向き合う』の中で強調しているのは植民地の問題です。日韓併合をどう解釈するかは長年の難問ですが、どうアプローチすればいいのでしょうか。

基本的に日本はこの問題に真面目に向き合ってきた、とは思いますが。だからこそアジア女性基金を評価しましたし、そのことを韓国はもっと知るべきだと考えています。日本では反戦意識が強いこともあまり知られていません。その上に植民地の問題が出てきて、「反省しない日本」の姿ばかりが目についてしまいました。ダーバン会議（2001年、南アフリカのダーバンで開かれた人種主義に反対する世界会議）以降の植民地化を正す流れを日本が先導し、国民レベルの深いところで考えてほしいという気持ちです。

——韓国の尹錫悦^{ユンシクヨル}新政権が5月に発足し、最近の世論調査では日韓関係の改善に期待が高まっています。

大統領が日韓関係の改善を積極的に発信しているのでも、前の政権に比べれば環境は整ってきました。それはそれでいいことだと思います。特に韓国で期待値が高まっている理由は、前の政権に不満を持つ人たちの考えが表れているからでしょう。これ自体は悪いことではないですが、問題は過去に対する保守の考え方がリベラルと違うかとい

パク・ユハ氏

1957年、韓国ソウル生まれ。韓国・世宗大名誉教授（日本近代文学）。東アジア歴史和解研究所所長。著書に『和解のために』（大佛次郎論壇賞）、『帝国の慰安婦』（アジア・太平洋賞特別賞、石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞）、『引揚げ文学論序説』など。『歴史と向き合う 日韓問題——対立から対話へ』の韓国語版も8月に刊行した。

うと、そうではないということですね。懸案について具体的によく知っているわけではありません。例えば、元徴用工問題にしても中身を知る人は少ないのです。日本の戦後についても同様です。ここには情報の不均衡という現象があります。

私は、互いに「相手を理解しようとする気持ち」を持つことが大事だと思えます。難しいこと、複雑なことは見たくないと思いがちですが、それでは不正確な情報にますます振り回されることになります。関係悪化はここ10年、20年関わってきた者たちの責任だという意識を持てば、新たな未来は開けると思えます。

* 『サンデー毎日』 8月21日・28日合併号の記事に加筆した。

（聞き手・岸俊光）